

カード  
の  
お味は？



## カードのお味は？

レジでペンを強く握り締め、『浅井なつみ』とサインした。インターネットで申し込み、先日やっと届いたクレジットカードだ。店員さんに、深々とお辞儀をされて、華やかな店を出た。

なつみは、社会人一年生。会社では名前をいじって『ダサイナスビ』と、大っぴらに陰口を言われている。その日も、ミスのため残業させられ、やっと会社を出た。いつもは自分とは無縁と割り切って通り過ぎるブランド街を、駅に向かって急いでいた。ふと顔を上げたとき、ショウウィンドウから白いふんわりとしたコートが目飛び込んできたのだ。なつみは、おずおずと店に入った。店員に勧められるまま、その白いコートに手を通した。驚いたことに、鏡の中のなつみは、とてもキラキラしていた。

大きな紙バッグを胸に抱えたなつみは、木造二階建てアパートへ、ようやくたどりついた。着古したジャージに絆纏を羽織ると、ほうっと一息ついて小さな冷蔵庫を開けた。ほとんど何も入っていない冷蔵庫から、陶器の容器をそっと取り出した。二年前に亡くなった母が大切にしていた糠床だ。手を入れて、何度もかき混ぜる。そうしていると、その日あった嫌なことを忘れられる。怒鳴りちらした課長の大声も、先輩の舌打ちも消えていくのだ。なつみは、ハッと我に返り、慌てて手を洗うと、コートを着た。風呂場の鏡は顔と襟しか映さない。

「どうするのよ、なつみ。こんな高いもの買ってしまって。白なんて汚れ目立つし、普段着れないじゃない。ばかだねえ。カードの支払いは、ボーナス出るからなんとかなるけど、あーあ、もっと節約しなくちゃ」

鏡のなつみは、ふっくらした頬を膨らませて眉を下げた。でもちよっと瞳が光っていた。

「今日はどこで食べよう？」

「オープンしたカフェへ行こうよ」

ランチタイムのそんなにぎやかな会話が遠ざかると、なつみは、自分のデスクのパソコンの陰に隠れるように、お弁当を出した。いつものことだから誰もなつみを誘わない。質素だけれど彩りよく盛り付けたお弁当。一人暮らしでも、ていねいに楽しんで作っている。

「浅井さん、お弁当ですか？おいしそうだなあ、ちょっと失敬」

顔を上げると、隣の営業課の瀬尾さんがさわやかな笑顔でのぞきこみ、ひょいとナスビのお漬物をつまみあげた。

「あっ、いえ、そんな。恥ずかしいですよ。田舎育ちだからお弁当までダサイんです」

「うわっ、うま！お袋の味だ！こんな弁当持ってくる人って、いいなあ」

瀬尾さんは、独り言のように言いながら、さっそうと出て行った。女子社員人気ナンバーワンの彼は、いつもひょうひょうとしている。

(期待してはだめよ。所詮あなたは『ダサイナスビ』なんだからね)

なつみは自分に言い聞かせ、高鳴る胸を静めた。

翌月のクレジットカードの引き落とし日、銀行で残高照会をした。

「あれっ！？」

なつみは、思わず声を出して、ATMの画面を何度も何度も見た。通帳の記帳もして確かめた。コードの代金が引き落とされていないのだ。日を間違えたのかと、それから毎日スマホで確認をした。でもやはり引き落とされていない。

「カード会社のトラブルかな。ネットで申し込んだとき、何度もやり直したからかなあ」

試しに通勤用の安い靴を買ってみた。翌月、ドキドキしながら残高照会をした。やはり引き落としはなかった。

「なに、これ……」

不安なような得したようなモヤっとしたものが、なつみの中にあふれた。それから、少しずつ、欲しかった物を買っていった。カードを出す度に心臓がグワングワンする。

(まとめて請求がきたらどうしよう。闇金融とつながっていたらどうしよう)

そんなことばかり考えたが、カードを使う誘惑に勝てない。

不意に後ろから声をかけられただけで、逮捕されるのかと真っ青になって固まってしまったり、いつも誰かが見張っているような気がしたり、落ち着かない日を過ごした。でも、何事も起こらず、月日が過ぎていった。なつみは、しだいに大胆になっていった。買い物だけでなく、エステにも通った。どんどん派手になり、見違えるように美しくなっていた。

「最近のダサいなすび、ケバイよね」

「あれは絶対やばいバイトしてるよ」

「バイトじゃすまないでしょ、あのブランドづくめ」

そんな噂が飛び交っても、なつみは平気だった。胸を張ってフロアを闊歩した。瀬尾さんの誕生日を調べ、イタリアから直接ネット注文したネクタイをプレゼントした。

「俺、以前の清楚な浅井さんのこと、実は好きだったんだ。でも、浅井さん、かわっちゃったね。これ、受け取れないよ」

そう言って、走り去る瀬尾さんの後姿を、なつみは、ぼんやり眺めた。ビルがゆがんで見え、サイレント映画の中にいるようだった。そして、翌日退職届を出した。

なつみは、高級な店で外食を楽しむようになった。いつも一人だったけれど、おいしいものを食べてると、それだけで心が満たされた。

ある日、旅先で、有名なブランド牛のステーキを注文した。カウンターの鉄板でジュウジュウとおいしそう匂いと音がする。でも口に入れると、何の味もしなかった。

「なんだろう、この店、ご大層な構えなのに、こんなまずいもの出して！」

腹をたてて席を立ち、その足で、評判のスイーツの店を訪ねた。出されたやわらかな色合いのフルーツタルトを一口ほおぼった。パサパサとして喉をこさない。味がないのだ。よい香りの紅茶もただの白湯だ。あわてて予定を切り上げて帰ってきた。

「だめね、旅行は。やはり家がいいわ。お取り寄せしようかな」

ネットで鼻歌まじりに検索し、あれこれと注文した。ところが、どんな物も味がしないのだ。

そんなことが重なって、しだいに、苦味だを感じるようになってきた。どんなにおいそうな物も、口に入れると苦味だけが広がって、すぐに吐き出してしまう。病院で診てもらっても内臓

も舌も異常がないと言われた。

「このまま死んでしまうのかしら」

真夜中、ふらふらと起き上がったなつみは、冷蔵庫を開けて糠づけの容器を取り出した。もう何ヶ月も開けたことのない蓋を取ると、表面が真っ白になり、黒や緑のカビまで生えている。それをすくって捨てるとう新しい糠を足して、かきまぜた。涙を流しながら、底のほうに残っていたなすびを、口に入れてみた。苦味がない。なつみは、次の日から、ひたすら糠床をかきまぜた。これだけがのどをこす食べ物になった。わずかな光にすぎた。しかし、とうとうこの糠漬けも苦くて食べることができなくなった。

「カードのせい？呪い！」

なつみは、カードにはさみを入れようとした。

「いやだあ！ダサイナスビに戻りたくないよお！」

ベッドに崩れ落ちると泣き叫んだ。泣いて泣いて泣いた。涙が枯れたとき、なつみは、心を決めた。

月日が流れた。なつみの都心の高層マンションは、北欧家具で統一され、何一つ不足のない住まいだ。静かな音楽が流れている。部屋の照明は落とされ、背の高いダークグレーのスタンドがやわらかい光を投げかけていた。壁面のキャビネットには、豪華な絵皿やアンティーク人形などが飾られていた。そしてそこに、無数のカラフルなサプリメントがバカラグラスに入っていた。

窓際のソファに、ゆったり沈み込むように座ったなつみは、うっとり夜景を見下ろしていた。ドレープのあるガウンとストールを身に着け、サイドテーブルにはタブレットが置かれていた。

「今度は何を注文しようかしら」

にっこり笑って、そうつぶやくなつみの左腕には、点滴がつながれていた。